

# 第8回 名誉と利益

（本編第20章より）

我々は日常生活のなかでた  
くさんの重荷を背負ってい  
る。重荷を自分の一部だと  
思いこみ、それを手放して自  
由になれることを忘れてし  
まっている。

満足することを知れば、  
辱しめにあわずにすみ、  
適当にとどめることを知れば、  
危険にあわずにすみ、  
いつまでも安全でいられる。

（『道徳経』第四十四章）

名声と生命とではどちらがより身近か。  
生命と財産とではどちらがより重要か。  
得ることと失うことではどちらがより有  
害か。  
このことから  
惜しみすぎるとかならずより多くの散財  
を招き、  
豊富に貯蔵すればかならずひどい損失が  
ある。

項羽は秦代末の楚の国に生まれた悲劇の英雄で  
ある。春秋戦国時代、楚は秦に征服された。項羽  
は大沢郷の反乱に乗じ、会稽郡で郡守を斬ったの  
ち秦を打倒すべく決起した。鉅鹿の戦いを経て都  
に入り秦を滅ぼすと、その名声は天下にとどろい  
た。秦に対し決起した者の中にはかの有名な劉邦  
もいた。項羽が名声と礼儀を重んじる名家の生ま  
れたのに対し、劉邦は平民の生まれだったが、  
機を見るに敏で行動は自在だった。このため、こ  
の二人の覇権争いは中国文学や演劇の永遠のテー  
マとなった。  
項羽には劉邦を捕らえるまたは倒すチャンスが何  
度もあった。はじめ、劉邦の勢力はまだ弱かったが、  
項羽は自分が弱い者いじめをすと思われたくない

がために劉邦を見逃してしまった。  
（中略）これは、項羽が天下の笑  
い者となりたくなかったせ  
いであるが、老子の「名  
声と生命」の道理  
を理解していな  
いことは明らか  
である。その後、  
劉邦の軍勢はし  
だいに強くなり、  
項羽を追い詰め  
てゆく。  
最終的に、項羽  
の軍は垓下の地に敗  
れ、兵も食料も尽き果て、劉  
邦の漢軍に取り囲まれてし



メンツに負けた項羽



魚「こういう愚か者がもっと沈んで来ないかなあ」

まった。夜、漢の兵士たちが楚の歌をうたうと、項  
羽は愕然とした。「楚の兵士はみな漢に降伏してし  
まったのか。楚の人間のなんと多いことか！」そし  
て項羽は愛する虞美人とともに最後の酒を飲む。虞  
美人はこの時までずっと項羽の行軍に付き添ってい  
た。項羽は愛馬騶を解き放ったが、いつこうにそばを  
離れようとしな。虞美人が「これまで何度も舞を  
舞えと仰せつかったですでしたが、私はその度に拒ん  
できませんでした。でも今夜は王のために初めて最後の舞  
を舞います」と言うと、項羽は「では私は歌で応え  
よう」と言って歌をうたった。これが有名な「垓下  
の歌」である。悲壮に満ちたこの詩は今でも十億を  
超える中国人の心をつつ。

力は山を抜き 気は世を蓋う  
時利あらず 驩逝かず

舞が終わると虞美人は自害した。項羽は漢軍に  
追われながら、東の烏江という河岸へたどり着いた。  
烏江の亭長（宿場役人）は項羽に「早く河を渡って  
ください。船を持っているのは私だけなので、漢軍  
が来ても渡すことは出来ません」と言った。  
項羽は笑って、「天が私を滅ぼそうとしているの  
に、渡ることなどできようか。昔、河の東の若者  
八千人を率いて河を渡ったが、今一人も帰らせる  
ことができない。河の東の者たちが私を哀れんで  
再び王にすると言ってくれても、私には会わせる  
顔がない」と言った。ここでも項羽は老子の「名  
声と生命」の道理をわかっていない。メンツのた  
めに再決起のチャンスを手放している。  
頭をあげ、大軍が間近に迫っているのを見た項  
羽は馬から下りると剣をぬいて戦った。数百人の  
兵を倒したが、ついに力を使い果たしてしまった。  
この時、漢軍に旧知の兵士を見つけた項羽は、「劉  
邦は私の首に千金をかけていると聞く。お前にひ  
とつ手柄をやるう」と言うと、自らの首を斬って  
自害した。  
項羽は自分のまちがいを顧みることせず、  
失敗は天と時のせいだとした。名誉を重んじるあ  
まり宿敵をなんども逃し、メンツにこだわるあま  
り故郷で再決起することをしなかった。名誉を  
重んじた楚の霸王も、重すぎる銅銭のために溺れ  
死んだ男も、同じようにその重荷のために沈んで  
いった。  
我々も日常生活のなかでたくさん重荷を背  
負っている。重荷を自分の一部だと思いこみ、そ  
れを手放して自由になれることを忘れてしまっ

いる。同期に先を越されるのを恐れ、人のうわさ  
を恐れるあまり、知らず知らず自分をだめにし  
てしまう。我々は人の評価を恐れ、自分のイメージ  
が悪くなるのを心配する。「自分は太りすぎじゃな  
いだろうか」「私の車はみつともなくないだろ  
うか」「自分はみんなに好かれているだろうか」とつ  
ねに考えている。  
表面的なことや物質的なものが自分自身の一部  
と化し、切り離して考えられなくなってしまう。  
「名声と生命とではどちらがより身近か。生命と  
財産とではどちらがより重要か。得ることと失う  
ことではどちらがより有害か」。老子の命題に対  
しいつも無意識に誤った答えを選んでしまう。老  
子の言葉は、このような者にとってよい処方箋に  
なる。



“パンを手に入れるこ  
とはもとより大事だが、  
その美味しさを楽しむこ  
とはもっと大事だ”  
比較文化学者である  
チーグアン・ジャオ氏が、  
身近な例から老子の人生  
哲学をわかりやすく解説  
した一冊。「よりよい老  
後」のために心身ともに  
無理を重ねる現代人に向  
け、老子の教えをもとに、  
肩の力を抜いて自然に生  
きることを勧める。  
2016年4月、日本僑報社刊



チーグアン・ジャオ 北京出身。カールトン・カレッジ教授、同済大学特別  
招聘教授、清華大学客員研究員などを歴任。中国社会科学院大学院  
で英米文学修士号、マサチューセッツ大学で比較文学博士号取得。  
著作に“A Study of Dragon, East and West”, “Do Nothing & Do  
Everything”, 「古道新理」, 「老子的智慧」, 「世路心程」, 「舟舟聽雨」, 「コ  
ンラッド小説選」など。2015年3月、マイアミでの遊泳中の事故により永眠。  
ミネソタ州の「スター・トリビューン」紙で「北極オーロラの星」と評価された。

町田晶 日中翻訳学院修了。東北大学文学部東洋日本美術史専攻、東北大  
学大学院文学研究科中国哲学専攻。学生時代の一人旅で中国文化の奥深さと  
中国人の温かさに触れたことから本格的に中国語を学ぶ。翻訳得意分野  
は思想、哲学、文学、食文化等。